

物語

明治30年。岩手県では度重なる凶作で貧しい地域も多く、病気で亡くなる人も多かった。病院も不足していて、医師や看護師を養成することが急務だった。

主人公、照良は勉強も優秀で将来が期待されていたが、貧乏な家に育ち、病弱で弱視になっていた弟がいるため、高等小学校を卒業したら農業を継いで家族を支えていこうと思っていた。ある日、弟が高熱を出して倒れてしまう。その頃、村には岩手病院の医師が訪れていて偶然、照良の家にいた村長の娘フミが医師を連れ、治療をする。照良は初めて見る、命をあきらめない医師の姿に心を動かされ、その職業の素晴らしさ

を実感する。看護師を目指しているフミに、将来の夢を打ち明ける照良。想いを知った父は村長に頭を下げて資金を借り進学させる。

時は経ち、岩手医学校4年生となった照良は同級生と共に勉学に励んでいた。照良は入院中の男の子、三郎と兄弟のように仲良くなり、時間をみつければ病室へ顔を出す。回復傾向にあった三郎だが照良の目の前で病気が急変する。何もできない自分を責め落ち込む照良に看護師となったフミはあえて厳しい言葉を投げかける。

岩手医科大学創立120周年を記念し、誠の医師を目指した青年の成長を描いた物語

矢巾町民劇場第21回公演

町民参加による手作りの舞台「矢巾町民劇場」（金子卓嗣実行委員会会長）の第21回公演「医志くつなぐ道」が2月11日・12日の両日、田園ホールで上演されました。

今回の作品は岩手医科大学創立120周年を記念し、誠の医師を目指して成長

する青年の姿から命の大切さを描いた物語。総勢約100人のスタッフやキャストが参加し、約2カ月にわたり練習や準備を積み重ねて本番に臨みました。公演には2日間で510人が来場。感動があふれる物語と出演者たちの熱演に、惜しみない拍手が贈られました。

医志

くつなぐ道

平成29年

2月11日・12日

田園ホール

脚本 矢巾町民劇場制作部

演出 佐々木絵梨子





① 主人公の照良(てるよし)。家は貧しいが勉強が好きで、学校では優等生



② 外で倒れて運ばれる照良の弟 茂(しげ)



③ 村を訪れていた岩手病院の及川先生が適切な処置を行い症状が落ち着く



④ 勉強が好きと言う照良に及川先生は将来の夢を聞く



⑤ 幼なじみのフミに、医者になりたいが親に迷惑はかけられないと打ち明ける



⑥ 照良の想いを聞いた父栄吉は村長に懇願して学費を借りる



⑦ 父に進学を進められ照良は医者を目指すことを決心する



⑧ 家族とフミに見送られて自分の夢に向かって旅立つ照良



⑨ 子どもたちの踊り 季節が流れ、数年が過ぎる



⑩ 照良は盛岡中学校を卒業後、私立岩手医学校に進学した



⑪ 岩手病院に入院する三郎を見舞う照良。フミが看護師として勤務している



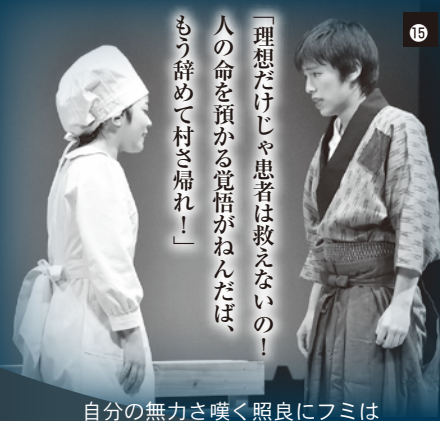
⑫ 行きつけの酒屋「さっこい」で将来の夢を語りながら酒を酌み交わす



⑬ 容態が急変して苦しみだす三郎 照良はどうしていいのかわからず動揺する

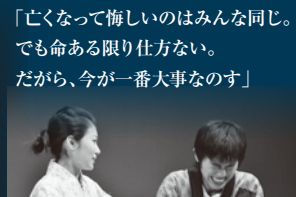


⑭ 懸命の治療にもかかわらず三郎は息を引き取った

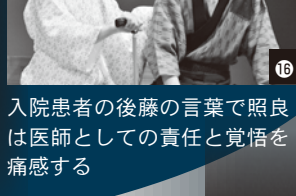


「理想だけじゃ患者は救えないの！人の命を預かる覚悟がねんだば、もう辞めて村さ帰れ！」

自分の無力さ嘆く照良にフミはあえて厳しい言葉をぶつける



「亡くなって悔しいのはみんな同じ。でも命ある限り仕方ない。だから、今が一番大事なす」



入院患者の後藤の言葉で照良は医師としての責任と覚悟を痛感する



⑮ フミに謝罪し改めて医師を目指すことを誓う照良

「病気を治すことは体を治すことだけではない。患者を安心させる力を持つのは医師だけだ。どんな薬や手術より、患者が生きたいという気持ちが大切だ」

「誠」の精神は、次世代へ受け継がれる――



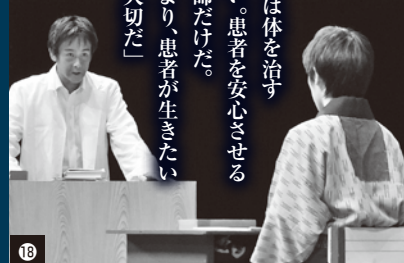
「地域へ尽くし、未来へつなぎ、誠の医者となれ」

岩手医学専門学校
開校式

⑯

⑰

校長の三田俊次郎先生 良太に医師の理念を語る



⑱ 及川先生が医師のあるべき姿を語る



⑲ 時は流れ昭和3年。医師となった照良とフミの子 良太が私立岩手医学専門学校に入学